

雁島涌出の由来 (茨城県常総市蔵持)



関東絵伝（場面）雁島の湧出・小舟に乗る親鸞と善性房

(1)「願牛寺縁起」より

雁島の伝説は、願牛寺の近くに住む一人の老女が親鸞の教えを受け、その喜びを雁の番いを贈ることで表した。親鸞がその番いの雁を沼に放つと、沼の中から嶋が浮き上がり、この嶋を「雁島」と名付けられました。

大高山證誠院願牛寺は、茨城県常総市蔵持にある浄土真宗本願寺派の寺である。寺伝では、建暦年間に親鸞聖人が大高山に寺を建立するとき、どこからともなく一頭の牛が忽然と現れ、牛の背をもって材木を残らず運び、寺の建立を見届けると、前の沼に飛び込んでしまい、その跡に牛の形をした枯れ木が出現した。このことにより、程なく建立された寺を「牛の願いによって成就した寺」ということで、親鸞聖人が「願牛寺」と名付けられましたと謂われています。

(2)「雁島の伝説」より

親鸞聖人が大高山に在りし時（建保元年 1213年 親鸞聖人四十一歳の時）姥山（現古間木村）というところに一人の老女がおりました。その老女は五人の夫に嫁しましたが、次々と死別し、また一人の獵師に嫁しましたが、不幸なことにまた別れることになりました。

老女は、「女人は五障の雲厚く、三従の霧深く閉じて成仏することはできない、まして自分は常に殺生を世渡りの業とし、夫まで死するなど罪業深きもの」と自身の罪業深重のほどを嘆き、願牛寺に参り、親鸞聖人に拝謁しました。

親鸞聖人は「弥陀の本願は極悪深重の衆生であっても、自身が極悪深重であると気が付いた者を救わんと誓われた本願である。五障の雲厚くも三従の山高くも、往生疑いなし、罪も報いも仏にお任せすれば、このような浅ましいものでも助け給うことも有難さ、尊さ。ただただ念仏するばかりだ」とのご教化をいただき、忽ち信心獲得の身となりました。

老女はその嬉しさのあまり、どのように御礼をしたらよいかと考えましたが、貧乏ゆえに儘ならず、以前に別れた獵師の夫が獵のときに遣った罠の雁の番いを親鸞聖人に献上しました。

親鸞聖人は、老女の志の深いことを感じられ、禎の彫り船を召して池中に出られ、番の雁の足に「嶋」という字を書き添えて、「皆に勧めている如来の本願がますます広がるようであれば、この沼に嶋を生ぜよ、雁もこれからもこの嶋に来るべし」といわれ、雁を放たれましたところ、雁が沼に入った途端に不思議なことに、沼から嶋が浮き上がり、雁がこれに泊まったので、この嶋を雁島と名付けられました。

この嶋は、毎年春秋の彼岸の頃、沼に浮き上がり、雁がその嶋に宿り、雁が立ち去るとこの嶋も消えて見えないようになるということで、雁島は「霊島」として関東随一の御日跡といわれるようになりました。

この雁島は、寺の西方にあります。



雁島湧出の由来 1



雁島湧出の由来 2